

恋愛と22世紀の構想

恋愛と、恋愛とかつて呼ばれていたものを取りまく環境の変化について

恋愛がなくなるとはどういうことか考えた。まず恋愛という言葉の意味を広辞苑第6版から引用してみよう。「男女が互いに相手をこいしたうこと。また、その感情。こい。」なるほど簡潔でわかりやすい。しかしこの簡単な言葉の意味とは裏腹に恋愛に対しての認識は人によって差があると言わざる終えないだろう。一種の娯楽、遊びと考える者もいれば延長線上に結婚を考える者もいる。ここで一部の恋愛に対する考えを抽出し考えてしまうとある意味での恋愛はなくなるがある意味での恋愛は残ってしまうかもしれない。ここでは全ての意味での恋愛と言われていたものを消していくためより広義的な広辞苑第6版から引用した意味での恋愛が無くなる事に関して考えていく。私が想定した未来は以下のようなものである。

- ・子孫を残す必要がないので人間の体から生殖機能がなくなる。
- ・上記の理由から今のような結婚という概念がなくなる。
- ・性別という概念がなくなる。
- ・現実世界の見た目にとらわれなくなる。（わかりやすいイメージだと脳みそだけのよう）
- ・科学技術や医療技術の発展により個人の老化による寿命なくなる。
- ・VRの技術が発達し人間の生活圏、活動圏が完全に仮想世界に移行する。（ARが発展していった場合は生活圏は現実世界なので人と直接コミュニケーションをとることははなくなると考える。今回の課題は恋愛が無くなる前提なのでより恋愛の無くなる可能性の高い生活圏が仮想世界に移った未来を想定する。）
- ・現在仕事と言われているものは大半が人間に代わりロボットやAIがこなしている。
- ・人間が働く必要がなくなったためベーシックインカムのような制度が発展し、生活に困ることがなくなっている。また、通貨などの概念も消えつつある。
- ・人間が働く必要がないので、人間にしかできないクリエイティブな創作活動をするのが人間の役割となっている。
- ・VRでの世界で活動し、VRの世界で物事が評価される。
- ・身分の差や住んでいる場所の差が（あくまで現実世界での。）なくなり全員が皆同じ土俵で様々なイメージやアイデアを製作、共有できる。
- ・VRでの生活が一般化しているため、逆に現実世界の良いところも評価され始める。
- ・現在で言う犯罪の激減、新たな犯罪の登場。

恋愛と呼ばれてたいものに対して未来の人間が受ける印象

現代を生きる我々にとって「かつて恋愛と呼ばれていたもの」に対しての印象はわからないというのが正直な気持ちである。恋愛は大学生である私の場合より身近なテーマである。同じような分野に興味を持った年の近い異性もしくは同性と関わる時間が多く、また学校外でのアルバイトや制作活動などでも様々な人とか変わる時間がある。学び舎であると共に良い出会いの場になっていることも間違いない。そんな中で私がかつて恋愛と呼ばれていたものの印象を想定するためにヒントにしたのが現代では無くなった習慣や習性だ。日本で言うと着物を着る文化や切腹など

である。少々センシティブな内容ではあるが人食や生贄なども当てはまるか。またフェロモンを感知する機能も現在では失われている。これらに関して言えるのは、説明されれば理解できるがそれはあくまで知識として理解しているだけであって共感はしていない。なんと言うか、やはりかつてあった事実や歴史的背景を知っても、あまり感情の変化はない。少し抽象的ではあるがリアリティがない。つまり未来において「かつて恋愛と呼ばれていたもの」は歴史の授業で学ぶどっかの国の文化と同じくらい退屈なのだ。きっとそんな印象なのだ。

未来での恋愛と呼ばれていたものの扱い

さてそんな恋愛は未来では一体どのように扱われているのか。現在は恋愛漫画や恋愛映画など恋愛を題材にした創作物が多々存在する。私は「電車男」という作品が好きである。根暗なオタクである主人公があるきっかけで知り合った美人なOLと様々な困難を乗り越え恋を成就させると言う物語だ。生活圈や趣味も全く違う、一見対極的な2人が愛の力で結ばれる。なんとも素敵だと思う。愛の力があればなんでもできる。少々雑だがそんな愛に力を感じさせる作品はある種の辛く厳しい現実を生きるモチベーションにもなっている気がする。しかしそれは自分にとって身近なテーマでありリアリティのあるテーマだから共感することができるのだ。では未来では？もしまだ学校などがあり授業の一環として恋愛に関して学ぶ機会があるのであれば歴史か理科？生物？の授業辺りだろう。学問としては研究がなされるであろうが。だが恋愛を扱った作品が消えることはないと思う。未来の世界において我々が生きる時代を表現するにあたって、今こんなにも根付いている恋愛というテーマを無しには語れない。過去の時代を題材に創作物を作る時にその世界感を支えるのは歴史的背景である。しかし、現在と同じくらい題材として力を持っているかと言われれば首を傾げてしまう。あくまで恋愛という表現はディティールにすぎない、恋愛というテーマをメインに扱う作品は数を大幅に減らすであろう。

「かつて恋愛と呼ばれていたもの」展

現在まで恋愛をモチーフにした作品が数多く生み出されてきた。それは絵画であったり彫刻であったり、表現媒体を問わず無数のものが存在しているだろう。しかし、未来においてその作品を本来の意味で理解することはできなくなっていく。なぜならかつて恋愛と呼ばれていた、何か知らないものをテーマにした作品だからである。作品は存在するがその意味はすっぱり死んでいる、そんな抜け殻のような作品が大量に残されるのだ。その作品群を前に恋愛を知らない人々は何を思うのだろうか。そんな問いかけを皮切りに、恋愛と呼ばれていたものに関する過去の作品を展示する企画をしたいと考えた。（展示という形態が残っているか定かではないが。）展示名は「かつて恋愛と呼ばれていたもの」展示場は仮想現実上の空間と現実世界である。この展示には2つの意味がある。一つは全く検討もつかない「かつて恋愛と呼ばれていたもの」に対して様々な過去の創作物をヒントにそれがどんなことだったか各々が考える場を設け、それをもとに再表現するワークショップ。全く知らないものに対して自分なりの考えを持ってアウトプットしてほしい。それがただの空想に過ぎないのか、はたまたこの展示をきっかけに形を変え再び人間同士に芽生えるものなのか。もう一つの意味は「現実世界の再評価」である。仮想現実での生活が一般化している世界で今一度現実世界でのリアルに目を向けてほしい。特に彫刻作品や絵画作品などは現実世界で展示しようと考えている。その場所に実際に足を運んで作品を鑑賞する。正直なところ未来の世界においてそんな面倒なことに意味があるのかは全く持って疑問であるが。しかしこの展示が現実世界でも開催されるということはVRが発展した世界にとっては非常に衝撃的な内容になると思う。様々な意見が飛び交い賛否両論が生まれると思う。しかし、そのようになるくらいの未来を私は生きてみたいと思うものだ。

